

映画「のぼうの城」に湧く行田市 オール行田で取り組む地域活性化

行田市には、全国に誇れる名所がある。古墳時代を象徴する『さきたま古墳群』、そして全国の約8割を生産していた地域の一大産業である『足袋』、戦国時代初期に築かれた関東七名城の一つ『忍城』だ。その忍城に新たな歴史が加わった。映画『のぼうの城』公開である。今、公開を間近に控えて市内は活気に湧き、地元経済の活性化に向けた取り組みが繰り広げられている。映画公開に向けた行田市の現状をレポートする。



市役所ロビーに立て掛けられている『のぼうの城』のポスター

秩父鉄道の行田市駅を降りて、中心市街地を歩くと『のぼうの城』公開をアピールする仕掛けが至る所で目につく。商店街では『ようこそ行田市へ』というのぼり旗とともに、映画のポスターが貼り出され、映画の舞台となった忍城址にも『忍城』の文字が書かれた旗が風にはためいている。いよいよ、待ちに待った『のぼうの城』の公開が間近だという雰囲気伝わり、市民の映画公開に寄せる期待の強さを感じた。

『のぼうの城』は当初、昨秋には公開される予定だった。しかし、3月に東日本大震災が発生し、津波で多くの人々の命が奪われた。実は『のぼうの城』には、その津波を連想させるシーンがあることから、映画制作会社では敢えて公開を自粛し、一年間先送りにした経緯がある。公開延期の知らせを受けた行田市は、市民ともども一度は落胆したものの、公開が中止となったわけではないことから、気を取り直しての一年間、行田市の売り込みをさらにパワーアップさせることにした。

その代表的な取り組みが、市民や市内商工業者らによる『おもてなし大作戦』だ。全国で映画を観た人たちが、行田市に興味を持ちそして行田市に行ってみよう、という気持ち

になると予想。実際に訪れた観光客を目いっぱい歓迎するため、いま全市を挙げた“オール行田”で取り組んでいる。最初におもてなし機運が高まったのが市内の飲食店で、既に映画公開の発表直後から始まっていた。例えば、行田食品衛生協会と行田商工会議所、行田市観光協会が協力して『飲み食い処マップ行田』を発行、訪れた観光客に配布して市内での飲食を満喫してもらっている。マップには、中華や和食レストランをはじめ蕎麦屋、割烹料理店、居酒屋など62店舗を掲載、最近では地図を片手にまち歩きをする観光客が目立って増えてきた。マップで紹介している店だけでなく、市内の各店舗では独自に『のぼうの城』にちなんだメニューを開発、観光客の目と舌を楽しませている。さらには、団体ツアー客を受け入れるため、市内の5店舗で100人以上の団体客が収容できるよう態勢を整えた。

飲食に限らず、土産物用として新たなネーミング、パッケージを施した商品も売り出されている。その土産物には漬けものからお煎餅、菓子、雑貨など豊富で、既存の商品をアレンジしたものから新たに開発したものまで様々。中でも、創業から135年の歴史を誇る



忍城五人衆の漬物を販売している飯田屋商店(写真上)とブックカバーをパッケージにした漬物の詰合せ商品



漬物製造の飯田屋商店（飯田哲一社長）では、原作本のカバーイラスト表紙（上巻）をデザインしたパッケージで、『忍城五人衆・のぼう漬詰合せ』を目玉商品として販売を始めた。映画制作会社から特別にデザイン使用の許可を得たもので奈良漬やたまり漬、みそ漬けなどが詰め合わさっている。同社によると、10月からは関東圏内の郵便局で『ふるさと小包』として販売されることが決まり、12月末まで扱うと言う。

グッズ関係で目を引くのが『忍城オリジナル蒔絵シール』で、城主成田家の家紋や主役の成田長親、甲斐姫などのデザインが揃っている。1柄500円の販売で携帯電話などに貼り付けることができ、行田観光の土産物として注目されそうだ。このほか、行田市商店連合会では、土・日・祝日に忍城址の敷地内に『忍城おもてなし売店』を設置して、市内特産品などの販売も始めている。

ところで、行田市が『のぼうの城』の制作を知ったのは、2009年6月のこと。映画制作会社のプロデューサーら関係者5人が同市を訪問、行田市郷土博物館や丸墓山、石田堤を

案内した際に映画化の話聞いたと言う。翌7月になって、犬童一心監督が行田市を訪れ映画化のスタートが切られたことから、「順調に制作が進んで早くクランクインしてくれ

ることを願った」と市観光プロジェクト推進室は話す。制作が始まってからは、市の学芸員による史実説明や映画に関する地図、郷土芸能などの資料提供、市内ロケでの撮影場所交渉、エキストラ・ボランティアスタッフの手配、スタッフの宿泊先紹介など労を惜しまず全面的に協力してきた。

その結果、映画制作は問題なく進み無事にクランクアップ、いよいよ公開を待つだけとなったが、延期の報せが行田市に届く。しかし、市当局は延期に落ち込むことなく「全国に行田市をアピールできる時間が余計にできたとポジティブにとらえ、さらに事前PR活動の充実に動き出した。PR活動は既に、2010年7月から『忍城おもてなし甲冑隊』の結成で始まり、2011年1月には映画会社から提供されたポスター800枚を市内各所に掲示。6月になると、小説のカバーイラスト成田長親と石田三成の図柄を田んぼアートにして宣伝、今後は市内のNPO法人が独自イベントとして『関東コスプレ大会』の開催を計画している。

こうした全市を挙げてのPR活動で、行田市を訪れる観光客が目に見て増加してきた。一つのデータで示すと、映画制作が話題となってから忍城御三階櫓にある郷土博物館の入館者数が2009年度に5万3,402人だったのが、2010年度には6万3,324人に、さらに2011年



忍城オリジナル蒔絵シール

度には7万3,091人と毎年約1万人増えているほどで、本年度はさらに入館者数が増加する見込みだと言う。

増加する観光客の利便性を良くするため、行田市では新たに交通インフラを整備するなど、受け入れ態勢も整えている。市内へのもう一つの玄関口でもあるJR行田駅で、同駅を発着点にしている市内循環バスに観光拠点循環コースを新たに設定、さらに9月からは土・日・祝日に限って行田観光シャトルバスの運行も始めた。バスだけでなく、自転車で市内を回遊できるようにと、レンタサイクルを用意している。JR行田駅や古代蓮の里売店、行田市観光ガイドステーションなど6カ所で午前9時から午後4時まで無料で貸し出すシステムで、全国的に無料で自転車が乗り降りできるのは珍しい。また、利用者の負担を軽くする電動自転車もあり、こちらは一日500円で利用できる。

観光客が道に迷わぬように案内看板も整備している。地元のロータリークラブで秩父鉄道行田市駅から忍城址までの看板を設置、市もJR行田駅から忍城址まで案内看板を設けるなど官民一体となって整備を進めてきた。さらに、忍城址には観光客の休憩用にとテーブルやイスを設置し、トイレなどへの案内看板を増設するなど、観光客が不自由しないように利便性を向上させている。

全市を挙げた“オール行田”でのおもてなし大作戦のキーステーションとなるのが、行田市商工センター内にある『観光情報館ぶらっとぎょうだ』で、今年4月に開設された。同情報館には休憩コーナーがあり土産物も販売しているほか、市内の観光スポットの説明も行っている。同情報館だけでなく市内には33カ所の『見処案内所』もあり、担当者が懇切丁寧に市内の見所を案内して積極的に情報



今年4月に開設された観光情報館「ぶらっとぎょうだ」=行田市商工センター



観光情報館には映画にちなんだ土産物も販売されている

を提供。それを支える市民に対しては、10月に『行田検定』を実施し、市民総ガイド化を図っていく。

映画の公開効果で行田市は盛り上がるが、問題は終了後のことで、全国的にアップした知名度を保ちながらさらなる観光客の増加にどうつなげていくのか、加えて湧きあがった市民の熱を地域の持続的活性化にどう結び付けていくのかである。市では引き続き『忍城おもてなし甲冑隊』を存続させることを検討、マスコミなどで取り上げてもらうほか、映画ゆかりの地以外の古代蓮や足袋蔵、利根大堰などの観光資源をPRして引き続き観光客誘致を進めていくと言う。

さらに、地元経済の振興でも映画を契機に新しく開発された新商品や新メニューだけでなく、今後も消費者ニーズに合わせた物産品の開発を促し、行田特有のブランド商品化を目指していくことにしている。市観光プロジェクト推進室では、「映画の公開で増加した観光客から見た“外から視線”が今後のまちづくりに役立つ」と話し、「良いものはどんどん取り入れて行田市の発展につなげたい」と、『のぼうの城』公開を最大限活用していく方針だ。

映画「のぼうの城」に湧く行田市 公開を前に工藤正司行田市長に聞く



「今は満を持して映画公開を待っている」と話す工藤正司市長

いよいよ行田市を舞台にした映画『のぼうの城』が11月に全国一斉に公開されます。昨年3月の東日本大震災の発生から、公開を1年見送った話題の映画で、行田市民はもとより全国の映画ファンが心待ちにしていた大作です。いま行田市は、この『のぼうの城』公開を前に市全体が盛り上がり、市民の心も湧いている状況で、特に映画を観た人々に行田市を訪れてほしいと、おもてなしの心で観光客を受け入れる準備が整いました。そこで、陣頭指揮に当たる工藤正司市長に映画『のぼうの城』の魅力や観光客の誘致策、さらにはまちづくりへの取り組みについてお聞きしました。

(聞き手 松本博之調査事業部長)

松本 昨年秋に公開予定だった「のぼうの城」がいよいよ公開されますが、今の気持ちをお聞かせください。

工藤市長 今の気持ちを率直に言いますと、約1年延期されて良かったと思っています。全国に行田市をアピールする時間を余計に頂き、全市を挙げて盛り上げる期間を得たという気持ちで、昨年はポジティブに延期を受け止めていました。今は満を持して公開を待っているという気持ちでいっぱいです。

松本 映画公開は行田市にとって、どのような影響を与えるのでしょうか。

工藤市長 映画は11月2日に全国公開されるわけですが、作品の舞台となった本市にとっては、大きなターニングポイントになると思っています。

ですから、映画を通して全国の多くの人たちに本市に興味を持って頂きたい。そして、実際に本市に足を運んで映画ゆかりの地をはじめ、全国に誇る埼玉古墳群や足袋蔵、グルメなど様々な本市の魅力を知って頂きたいと願っています。オール行田による『おもてな

し』で、観光客の皆様をお迎えする準備は既に整っていますから。

松本 埼玉県民であれば、映画の舞台となった忍城が行田市の中心市街地にあることは知っていますし、歴史好きな方は戦国時代末期に戦場となったことも承知していますが、映画のストーリーを少し教えてください。

工藤市長 そうですね、詳しく話してしまうと映画を見る興味が失わせてしまいますので(笑)、ごく簡単に説明しましょうか。時は戦国時代末期で、天下統一を目前にした豊臣秀吉が、最後まで抵抗する小田原・北条氏を攻めることになりました。その戦の中で、秀吉の命を受けた石田三成率いる2万の大軍が、北条氏の支城である忍城に押し寄せ、城を水没させる水攻めをしたのです。しかし、わずか500人足らずで守る城兵は降伏せず、水攻めに耐えて城を守り抜いたという、史実を基にした攻防戦を映画は描いています。この行田市を含めて関東一帯は、古くから坂東武者としてその勇猛さを知られていますが、まさに忍城の武者は坂東武者の典型的な見本

だったわけです。

松本 石田三成の忍城水攻めは、秀吉の備中高松城での水攻めを真似たと言われていますが、結局は失敗した…と。その史実を基にした映画であれば、見所も随分と多いでしょうね。

工藤市長 ええ、十二分にあります。映画の制作会社によりますと、日本映画の歴史を塗り替える壮大なスケールで描かれる大規模な合戦シーンや、両軍のキャラクターたちが織り成す濃密な人間ドラマなど、誰もが楽しめる見所満載の作品に仕上がりました。まさに老若男女のすべての方々までが楽しめる内容で、約2時間20分の間は目が離せないことでしょう。

忍城は市のシンボル、市民の誇り

松本 ところで、映画のタイトルにある『のぼうの城』の忍城は、行田市にとってあるいは市民にとって、どのような存在なのでしょう？

工藤市長 忍城は映画でも描かれている通り、『浮城』という別名がありまして、15世紀後半の室町時代に成田下総守なりた しもうさのかみあきやす 顕泰によって築城され、明治時代に取り壊されるまで、忍藩10万石の要として栄えていました。現在の『忍城御三階櫓』は、天守閣がなかった忍城の中心的建築物で、1988年に再建され、現在は郷土博物館の展示室の一部になっています。その忍城は当市のシンボルであり、『忍城御三階櫓』の再建と同時に整備された忍城址は市民の憩いの場となっています。築城当時から関東七名城の一つに数え上げられ、江戸時代には北の守りの城として重要視されていたこともあり、市民にとっても忍城は全国に誇れる存在と言えるでしょう。

松本 市民も映画の公開を楽しみに待って

いると思いますが、工藤市長ご自身はどのように楽しみにしていますか？

工藤市長 一言では言い表せませんね。とにかく、キャスティングが凄いですよ。主役の野村萬斎さんをはじめ脇役も有名な役者さんばかりで、ジャンルを超えた国内屈指の豪華キャストが顔をそろえているのですから。これはもう大ヒット間違いありません。と言うことは、全国の大勢の人がこの映画を見れば、それに比例して行田市も注目を集めることになりますので、その事も楽しみにしています。

あと、映画の最後の部分、エンドロールには現在の行田市の風景が流れることになっていますが、中心市街地だけでなく石田軍が陣を張った古墳群周辺も含まれ、それを観た人たちが行田市を訪ねてみたいと思って頂けるのではないかと、本当に公開を心待ちにしています。

松本 聞くところによりますと、市民の方々も映画に出演したとか…。

工藤市長 ええ、そうなのです。エキストラとして60人を募集したのですが、募集からわずか3日間でその5倍近くの応募があって、急いで締め切りました(笑)。

予想はしていたのですが、皆さん募集の開始を待っていたようで「良い思い出になる」



復元された忍城御三階櫓は行田市のシンボル



忍城 城内

と喜んでいました。エキストラ出演した市民の皆さんは、映画の中で自分自身を見つけられるか楽しみにしているでしょうね。

松本 先ほど、映画を観た人たちが行田に興味を抱き大勢の人に訪れて頂いた時には、オール行田で『おもてなし』をすることのお話がありました。そのための準備はもう既に整っているのでしょうか？

工藤市長 ええ。『のぼうの城』の映画化に合わせて、2010年7月に主人公となる成田家の武将たちをモデルに『忍城おもてなし甲冑隊』を結成しました。その甲冑隊は、現在の『忍城御三階櫓』がある忍城址を拠点にして観光客へのおもてなしや演舞パフォーマンスなどを披露。市内外でも観光PR活動やホームページで、行田の見所あるいはグルメなどの情報発信を行っています。

松本 行田という市を全国に売り出すには『のぼうの城』は絶好の良い機会で、知名度アップには欠かせませんね。

工藤市長 まったくその通りで、甲冑隊などはその大役を十分に果たしている存在でしょう。毎回、演舞パフォーマンスの見せ方を工夫していますので、土・日曜日や祝日の日には、忍城址に300人を超す観光客が訪れるようになりました。テレビやマスコミで取り

上げられるたびに話題を呼び、“追っかけ隊”まで組織されているほどです。市のホームページにも甲冑隊の活動を紹介していますが、ブログのアクセス回数では歴史好き部門で全国第3位になるほどで、行田市の知名度アップに貢献していることは間違いありません。今後も、イベントで要請があれば全国各地に甲冑隊を派遣させるなどして、あらゆる機会をとらえて、行田市の情報発信に努めていきたいと思っています。

映画公開をステップに観光客を誘致

松本 行田市の地名がアップすれば、観光客も比例して増えることが期待されますが、工藤市長ご自身は、この行田市の観光についてどのようにお考えですか？

工藤市長 私としては、日本の歴史を通して様々な観光資源があり、全国に自慢のできる市だと自負しています。古墳時代の埼玉古墳群や古代蓮を皮切りに、中世では今回の映画に代表される忍城、さらに近代になると足袋の街として栄えた歴史遺産があり、その時代ごとに代表的な観光資源が豊富にあるのは全国でも珍しいのではないのでしょうか。住んでいると意外と分からないもので、私や市民がまだ知らない観光資源というのがまだ眠っているかもしれません。そうした観光資源を市民と一緒にもう一度、見直して発掘していくことも必要だと考えています。

松本 映画の公開は観光客の増加に大きなインパクトを与えそうですが、その観光客の誘致で何か対策とか、方策を考えているのでしょうか。

工藤市長 そうですね。いろいろと観光客誘致の施策を取りまとめましたが、紙幅の関係もあるでしょうから主な誘致策を挙げます

と、まず市内に点在する観光スポットをスムーズに楽しめるように、市内循環バスを活用して主な拠点を回遊できるようにしました。また、古代蓮の開花時期には、JR 行田駅と古代蓮の里を結ぶシャトルバスの運行も行っています。バスだけでなく自転車で市内を観光できるように、観光レンタサイクルも導入して、観光客の皆さんに使いやすいようなシステムにしました。また、先ほども話題になりました、人気のある『忍城おもてなし甲冑隊』の継続活動や秩父鉄道さんによるラッピング列車の運行、あるいは行田観光バスツアーも実施していきます。鉄道会社とはJR 東日本と秩父鉄道と連携した『駅からハイキング』などを開催して集客を図っていますが、民間事業者の協力を最大限に頂きながら食事や土産物の品揃えを充実させ、とにかくオール行田によるおもてなしを展開して観光客を誘致していきます。

松本 現在も県内外から多くの観光客が訪れていますが、当面どのくらいの観光客数を目標としているのでしょうか。

工藤市長 現在、行田の入込観光客数は年間で約100万人が訪れていますが、そのうち60~70万人が埼玉古墳群に集中しています。何故かという、小・中学校での社会科見学があるからで、それ以外の純然たる観光客数の底上げを図りたいですね。映画関係者によりますと、一般にご当地映画が上映された場合、観客動員数の10-20%の人が作品の舞台となった場所を訪れているとのこと。今回の『のぼうの城』では全国で300万人の観客動員を見込んでいることなので、取らぬ狸の皮算用になりますが、約50万人に行田を訪れて頂けないかと望んでいます。そうなれば、来年は150万人の入込観光客数の達成も実現できるかもしれません。

松本 映画の公開で盛り上がった行田市が、公開終了後に冷めてしまっては困ります。そこで、最後に公開後の『のぼうの城』をどのような方法で、まちづくりにつなげていくのでしょうか？

工藤市長 “人が集い、モノが動いて”こそ、街に賑わいと活力が生まれると考えています。『のぼうの城』は数か月ほどで公開は終わりますが、映画の効果を最大限に活用しながら、“行田ならではの魅力あふれる”情報をこれまで以上に積極的に発信し、行田に何度も訪れてくださるリピーターを確保して、さらなる観光客の誘致に努めて交流人口を増加させていくつもりです。まだまだ、この行田には街を活性化させる資源が豊富ですから大丈夫でしょう。例えば、『のぼうの城』に登場する甲斐姫という人物がいますが、この甲斐姫だけでも1本の映画ができるほど魅力的な素材で、NHKの大河ドラマの主人公として売り込みたいぐらいですよ。映画の公開が終わっても、街を活性化させる材料は豊富にありますので、どうぞこれからも行田市を応援してください。

松本 本日はお忙しいところ、ありがとうございました。



勢揃いして観光客を出迎える『忍城おもてなし甲冑隊』